

「電気・電子機器」

円子 正良

MARUKO Masayoshi

自然環境を尊ぶ
技術者を育てたい

「エネルギーの大量消費により引き起こされる電力不足と地球温暖化。待ったなしの世界的課題に、草の根レベルから向き合うことが私の使命です」。柔和な表情が印象的な円子正良さんだが、その語り口は力強い。昨年1月の着任から約1年半。朗らかな性格です。すっかりコロンビアに溶け込んでいる印象だ。

そんな円子さんの転機は60歳のとき。「大学で電気・電子の世界に飛び込んで以来、電子工学の専門性を生かした製品開発・販売に従事してきました。周りは定年を迎える年齢で、自分も第二の人生を考えていたとき、ふとシニア海外ボランティアの広告が目に入った

JICA Volunteer Story

PROFILE

青森県出身。1970年に秋田大学鉱山学部(現工学部)を卒業し、クラリオン株式会社へ入社。79年に独立し、カーオーディオ専門店・マルコトニクスを経営する。2008年ザンビア、11年ガーナに続き、3度目のシニア海外ボランティアとして昨年1月からコロンビアで活動中。



学生に太陽光エネルギーを用いた電気自転車の製作を指導する円子さん

「クリーンエネルギーの可能性を伝える」

熟練の技術と経験を生かし、コロンビアの学生に太陽光発電を生かした製品開発を指導する円子正良さん。技術だけでなく、自然体でものづくりを楽しみ、自然環境を思う姿勢が、現地の学生の自発性を育てている。



んです。開発途上国の子どもたちの輝く瞳がとても印象的で、自分も国際協力がしたいとひらめき、気が付いたら応募書類を書いていました。2008年に初めてザンビアに派遣され、11年にはガーナへ。昨年からはコロンビアで活動している。

円子さんの配属先は、コロンビア国内32県に約120の教育センターを持つ大規模組織、国立職業訓練庁(SENAT)だ。実際に活動を行っているのは、アンデス山脈に位置する人口32万のアルメニア市にある教育センター。この一学科である建築工業センターで、学生と共に、太陽光発電システムを駆使した電気自転車の開発に取り組んでいる。

所得水準で中進国以上とされるまでに経済成長が進んだコロンビアだが、地方部の生活インフラは依然貧弱なままだ。円子さんは「家電製品の普及で電力使用量が増え、電力不足が深刻になっています」と説明する。頻繁に起きる停電に、着任当初は苦しめられたという。他方、「エネルギー需要が高まっていることは、クリーンエネルギーを普及させるチャンスでもありません。単なる技術だけでなく、自然環境を尊ぶことができる技術者を育てようと考えました」。逆境といえる環境も、円子さんにとってはエネルギー源となった。

小さな積み重ねに広がる 協力者の輪

「技術者を育てるには実践が重要。習うより慣れろ、ですね」。赤道直下で日差しが強い地理条件を踏まえ、円子さんはまず、自転車にソーラーパネルを組み合わせた電気自転車の製作を提案した。「地域に即した身近な素材で取り組めることがポイントでした。ものづくりに関心がある学生が集まっているので、意欲的に機材集めにも取り組んでくれました」と振り返るように、活動は順調に滑り出した。約半年間の試行錯誤の上、完成した電気自転車は「天照(あまてらす)」と命名。



a. 完成した電気自転車「天照」。学生も積極的な姿勢で製作に取り組んだ
b. 電気自転車に住民も興味津々だ
c. 「天照」の路上試運転では、多くの住民から質問が飛んだ
d. 電気自転車に乗る円子さん(右)。バリエーションも豊かだ

路上での試運転では集まった多くの市民から質問が飛びなど、関心の高さが際立っていたという。活動を進める上で何より大切にしているのは、学生や同僚ら、多くの人を巻き込んでいくことだ。過去2度のボランティア経験も踏まえ、「言葉も決して流ちょうではありませんし、機材調達に向けて資金集めが必要になることもあります。ボランティアが一人で行えることは限られますが、まずは自分がどんな人間かを知ってもらうため、積極的にコミュニケーションを図るように心がけています」と、常に前向きな姿勢を崩さない。同僚向けには活動レポートを毎月配布し、現地の自然環境調査では学生と行動を共にするなど、小さな積み重ねで信頼関係を深めている。

そんな円子さんの姿勢に影響され、同僚や学生の目の色が変わった。円子さんが電気自転車の製作に取り組んでいたとき、誰も他クラスの学生が集まり、アシスタントを買って出たという。「自ら興味を持って動いてくれたことを、とてもうれしく思いました」と表情を緩ませる円子さん。学生らのアイデアで「天照」の紹介ムービーを作り、学内外にPRする機会を設けるなど、円子さんの予想を超える成果につながっている。

任期が残り半年となった円子さんの次なる目標は、太陽光発電を生かしたさまざまな製品開発だ。「コーヒーをつくる過程に必要な乾燥機や、移動販売によく使われているリヤカーなどには、低予算で太陽光発電を導入できそうです」とアイデアは尽きない。多くの同僚も関心を示しているという。「小さなアイデアでも、少しずつ広がっていくけば、世界を巻き込む力に変わると信じています」

「前任国のガーナでは、私の帰国後、同僚がソーラーパネルを使った携帯電話充電器を開発しました。この連絡をもらったとき、本当にやりがいを感じましたね」と円子さん。ここコロンビアでも、円子さんの思いを受け継ぐ人たちの輪が、既に広がりを見せている。